

代諸遺跡出土の幾例かのクリ材はいずれも *C. crenata* と見るべきもののみである。葉化石は第三紀以後 *C. kubynii* Kov., *C. Ungerii* Heer, *C. vulgaris* Lam., *C. crenata* Sieb. et Zucc. 等の名で相当例が報告されている。併し *Castanea* の葉は互に極めて類似し、生品でも毛等の性質によつて僅かに区別し得ることが多く、また *Quercus* の若干種との区別も困難なものがある。例えば *C. crenata* と *Q. acutissima* クヌギの場合も之に当り、在來 *Castanea* の名のもとに報告された葉化石のうちに *Quercus* の混入している危険性もあり、またこの反対に *Quercus* としたものに *Castanea* の混じているおそれもある。今回材構造から *Castanea* に属することも、また現存の *Castanea* 各種と差異を有することも明確な一種が、本邦第三紀に存在したことを明かにすることが出来た次第である。

#### 引用文献

金平亮三 (1926): 大日本産重要木材の解剖學的識別。

尾中文彦 (1936): 古墳其他古代の遺構より出土せる材片に就て。日本林學會誌, 18 (8): 588-602.

Shimakura, M. (1936): Studies on the fossil woods from Japan and adjacent lands. Contribution I. Sci. Rep. Tohoku Imp. Univ., Sendai, Japan, Second Ser. (Geology), 18 (3): 267-310.

山林 暹 (1936): 朝鮮木材の識別。

唐 耀 (1936): 中國木材學。

○我が愛蔵の和蘭植物學書 “古い和蘭の植物學書にシーボルト等の手によつて輸出された日本の植物の記事が載つていたりするのは大変嬉しいものだ。この様な書物の中で下記のもの等は喜んで所蔵している。Annales d' Horticulture et de Botanique. 5 vols., W. H. de Vriese: Tuinbouw-Flora 2 vols., C. A. J. A. Oudemans: Neerland's Plantentuin 3 vols. また F. Houttuyn: Natuurlyke Historie 20 vols. このホッタインの書は曾て田中芳男先生から全部貰つていた。それは書中の画に特に手彩色が施してあつた。もと徳川時代の駿府の学校に在つたものだと言はれる。ひと年田中芳男先生の七八記念展覧会のあつた時、十冊だけを私が出品したが、其の後田中家から東大の図書館に先生の図書が寄贈された時、一緒に行つてしまつて、今手元には残りの十冊しかない。この他、愛蔵のものとしては Oskamp の Afbeeldingen der Artsenry-Gewassen がある。今一つ Ettinghausen und Pokorny の Physiotypia Plantarum Austriacarum 10 vols. がある。この書は竹中要博士から譲つて貰つたもので、日本には四部か五部位しかなく、大抵前半の5冊しかないものであるが、拙宅のものは十冊(全部)揃ひで大いに自慢すべきものである。書物で植物を顕はす技術は実に特色のあるもので、Ettinghausen 博士の羊齒類などの書物には皆この技術が用いてある。東北大学の木村有香博士もこの技術の書物を大分集めておられた。”

(牧野先生一夕話 II—文責在編輯)